

令和5年度(第54回)中国地区老人福祉施設研修大会〔分科会別〕発表事例一覧

第1分科会A（特別養護老人ホーム等） テーマ：「医療・介護連携・看取り」「認知症対応」

会 場：岡山コンベンションセンター 2階 レセプションホール

助言者：医療法人和香会 介護老人保健施設和光園／岡山県認知症介護実践研修指導者 藤井 一樹 氏

座 長：島根県老人福祉施設協議会 研修委員長 高田 泰徳 氏

幹 事：岡山県老人福祉施設協議会 研修委員 高田 守弘 氏

	No.	テーマ ～サブタイトル～	県	施設 種別	施設・事業所名	発表者職名	発表者氏名
午前	1	特養で看取るということ ～コロナ禍で取り組んだ2事例～	広島県	特養	こじか荘	看護師	櫻井 永子
	2	A様の願い ～制限の中 できる事～	島根県	特養	笑寿苑	介護福祉士	野々村 耕太
	3	『お母さんをもう一度、家で寝させてやりたい』 ～ターミナル前のケア～	岡山県	特養	唐松荘	介護主幹	宮坂 勇治
	4	人生の最期に寄り添うケアとは ～みつきたい 本当の想い～	山口県	特養	青景園	介護職員	横田 眞希
	5	あのフライドチキンが食べたい！！ ～“食べる”ことから“生きる喜び”を感じてもらう～	島根県	特養	雪舟園	調理員	安達 俊二
	6	生かされることと生きること ～Yさんと職員の戦い～	山口県	特養	恵寿苑	ユニットリーダー	森野 由美子
	7	コロナ禍でも生きがいのある生活 ～楽しみのある生活に向けた取り組み～	広島市	特養	広島原爆養護ホーム倉掛のぞみ園	介護員 介護員	上 貢 祥太郎 曾根 由美
午後	8	ケアの充実を目指して ～BPSD評価を活用したケアアプローチ～	鳥取県	特養	若葉台	介護福祉士	奥田 泉 中井 光希
	9	認知症の方に「どうされましたか」と声をかけることのできる地域づくり ～誰もが住みやすい地域に向けて～	広島県	特養	すいれん	施設長	滝本 雄司
	10	思いをつなぐ ～生きたいと思う理由～	山口県	特養	梅光苑	介護主事	橋本 必勝
	11	Withコロナ ～人生を楽しもう～	広島県	特養	ジョイトピアおおさ	ケアワーカー	吉岡 麻里
	12	あなたの願い、思い 叶えましょう。 ～入居者様 職員の笑顔を増やそう～	島根県	特養	桃源の家	介護職	秋田 三奈

第1分科会B（特別養護老人ホーム等） テーマ：「自立支援（リハビリテーション・機能訓練、口腔、栄養）」「経営」

会 場：岡山コンベンションセンター 3階 コンベンションホール①

助言者：川崎医療福祉大学 医療福祉学部 教授 竹中 麻由美 氏

座 長：公益社団法人 広島市老人福祉施設連盟 研修委員長 栗栖 正樹 氏

幹 事：岡山県老人福祉施設協議会 研修委員 小澤 太一 氏

	No.	テーマ ～サブタイトル～	県	施設 種別	施設・事業所名	発表者職名	発表者氏名
午前	1	個別ケアにおけるリフト導入の取り組み ～リフトの導入による効果について～	岡山県	特養	天神荘	機能訓練指導員	大島 さおり
	2	「福祉×計測機器メーカー」の社会問題への挑戦 ～データ活用で介護サービスの質の向上～	山口県	特養	ひとつの会	主任機能訓練指導員	山本 享平
	3	健康はハミガキから ～研修動画を実施して～	岡山県	特養	あさひ園	看護師	小野田 利恵子
	4	排泄ケア見直しから得られた効果の検証 ～利用者様と介護者の双方が得たものは？～	広島県	特養	豊邑苑	介護職員	河原 美恵
	5	高寿園DXの取り組み ～新たなチャレンジがみんなを変えていく～	岡山県	特養	高寿園	介護福祉士	國政 理絵
	6	コミュニケーションボードを使用することで気持ちに沿ったケアに繋がった事例	広島市	特養	なごみの郷	介護職員	二宮 瑞恵
	7	まだまだできる！でもちょっと助けて ～利用者の“こだわり生活”立場をかえた関わり方での効果～	山口県	デイ	松寿苑	生活相談員	古川 麻衣
午後	8	個別ケアへの挑戦 ～従来型特養のハード整備を活かした業務改善～	鳥取県	特養	ル・ソラリオン名和	介護福祉士	世浪 猛
	9	社会課題「介護離職」と向き合う ～2040年を見据えた介護と企業のパートナーシップ～	岡山県	特養	せとうち	採用・広報担当	杉山 香織
	10	地域とのつながりを目指して	鳥取県	在宅	高草あすなろ西ケアプランセンター	介護支援専門員 介護支援専門員	三木 典子 前田 京子
	11	ご家族様とご利用者様の心を繋ぐ ～家族面会室の取り組み～	山口県	特養	ほのぼの苑	介護支援専門員	柏田 清美
	12	せとうちの郷の地域共生 ～法人理念「地域の中で共に生きる」の実現のために～	岡山県	特養	せとうちの郷	生活相談員	森田 圭輔
	13	～さまざまな不安はありつつも、魅力発信へ～ ～感染症と向き合い、新たな法人として出来ることを	広島県	特養	瀬戸すみれ園	生活相談員	日下部 浩司

※抄録資料に記載の内容(発表者等)が変更になっている場合がございます

1B-1

個別ケアにおけるリフトの導入の取り組み

リフト導入による効果について

床走行リフト

福祉用具

介護ロボット

岡山県笠岡市

とくべつようごろうじんほーむ てんじんそう
特別養護老人ホーム 天神荘

機能訓練指導員 おおしま さ お り
大島さおり

共同研究者 川合 茂文

TEL: (0865) 67-4111 FAX: (0865) 67-2155 e-mail: s-ooshima@tenjinkai.org

施設（事業所）
またはサービスの
概要

昭和 56 年 6 月事業開始、平成 18 年 9 月に移転改築し、ユニット型特別養護老人ホームとなる。11 ユニット 110 人、ショートステイ 1 ユニット 10 人で実施。平均年齢 89 歳、平均在居期間 3 年 11 か月、平均介護度 4.0

I. <取り組み課題>

特別養護老人ホーム天神荘では、ユニットケアの理念である「その人らしい暮らしの継続」を合言葉に個別ケアを行っている。ユニットケアでは人員配置の関係から、早朝や夕方など職員が一人に対応しないといけない時間ができてしまう。移乗動作に職員が 2 人で対応しないといけない入居者は、職員のいない時間帯は離床して食事ができず居室で対応をしたり、トイレで排泄をしたくてもパット交換で対応するなど、入居者の「暮らしの継続」に影響を与える状況であった。職員が一人でも離床やトイレ介助が行えるように、床走行式リフトをはじめとしたリフトの導入を検討することとなった。

II. <具体的な取り組み>

機能訓練指導員をリーダーとして、ノーリフト研修会等へ参加したことがある介護員で、床走行式リフト導入検討委員会を結成した。様々な床走行式リフトのデモ機を借りて、実際に使用してみて、天神荘での使用環境などを鑑みて一番使用しやすいものを選定した。各ユニットに 1 台ずつの 12 台を導入し、職員全員に対して、リフトを導入する意義や、リフト使用方法の勉強会を行った。初めて使用する際や使用に慣れるまでは、機能訓練指導員が立ち会うようにした。当初 12 台の導入であったが、一台のリフトをユニットの端から端までの移動に時間がかかることや、入浴時に使用すると他の方の離床の際にリフトが使えないなどの状況が生じてきたため、追加で 6 台購入した。併せて、トイレや入浴時にも一人で介助が行えるよう、起立補助のリフトも導入し、2 ユニットに 1 台行渡るように導入した。

III. <活動の成果と評価>

・床走行式リフトや起立補助のリフトの導入により、以前は職員 2 人で介助していた方でも、職員が一人で移乗介助ができるようになり、「その人らしい暮らしの継続」が実践できるようになってきた。また、車椅子へ座った後の姿勢が良くなり、移乗後に座り直しをする必要がなくなったり、ベッド臥床後の寝る位置を直すことも少なくなった。そのため、職員の腰痛や利用者様への苦痛が軽減された。パット交換で対応していた方もトイレへ行くことができるようになった。前抱えを行うことで、車椅子などへ足をぶつけて内出血や皮膚剥離をおこしたり、体重の重たい方を支えられなかったなどといった、移乗時におこるけがなどのリスクも減った。

IV. <今後の課題>

リフトを使用するにあたり、建物の構造上、居室や浴室でのリフトの取り回しが難しいことがある。また、リフトのスリングを装着する際に前かがみで作業するようになる。それらによる腰痛が発生しているため、リフトを取り回ししやすい環境や前かがみにならない工夫などが必要。

まだ、前抱えをした方が早いという職員もいるため、なぜノーリフトが重要か再認識を行う必要がある。

1B-2

福祉×計測機器メーカーの社会課題への挑戦

機能訓練の未来

生活習慣の改善

フレイル予防

データ活用で介護サービスの質の向上

山口県防府市

しゃかいふくしほうじん ひとつのかい
社会福祉法人 ひとつの会

機能訓練指導員 やまもと きょうへい
山本 享平

看護師 渡邊 由味子

Fax 番号：0835-28-8832

今回の発表の施設
またはサービスの
概要

社会福祉法人ひとつの会は山口県防府市を拠点にデイサービス、軽費老人ホーム、グループホーム、特別養護老人ホームなどの介護支援事業を展開しています。法人理念「人の為に走れ」。人の為に尽くすことを最大の喜びに突き進んでおります。

<取り組み課題>

2025年には75歳以上の後期高齢者が著しく増加することが予想されており、「介護予防」は超高齢化社会を迎える日本の課題である。自立した生活を送るためには、認知症、生活習慣病、フレイルの予防、改善が必要になる。機能訓練を実施する中で利用者や家族から「日常の生活習慣で健康になっているかわからない」「記憶力や会話など日常の心身の変化に不安を感じる」「施設や家庭での取り組みに張り合いがない」などの心配の声があった。計測機器メーカーと協働のもと、利用者の健康状態の見える化とアドバイスにより行動変容を促す仕組み（健康増進プラットフォーム・アプリ）を開発し、生活習慣の改善、フレイル予防を目的に取り組んでいる内容を報告する。

<具体的な取り組み>

生活習慣病やフレイルは、食事や運動・喫煙・飲酒・ストレス・コミュニケーションなど日頃の生活習慣に深く関与している。利用者の生活習慣が健康的かどうかを知るために、施設にてAGEs（終末糖化産物）を測定し結果を説明するなど、PDCAのサイクルに基づき、継続的に良いサービスを提供する取り組みを行った。

■機能訓練計画の作成（Plan）

・機能訓練指導員による利用者の個別訓練の検討

■機能訓練の実施と測定（Do）

・機能訓練指導員による利用者の個別訓練実施

・体力測定と追加測定

1) 週毎：AGEs測定

2) 3ヵ月毎：体力測定（5M歩行、握力等）、InBody測定（筋肉量・体脂肪量・骨格筋指数（SMI）など）

3) 期間中1回：MCIリスク検査（血液検査）

■結果の評価（Check）

・機能訓練指導員：訓練結果と測定結果のチェック

・看護師：健康チェック

■レポート配布と指導（Action/Assessment）

利用者の健康状態の変化を確認し多職種でミーティングを行い、協力して適切な対応を行った。

・管理栄養士：栄養指導 ・看護師：生活指導

・相談員：家族や利用者の状態をアセスメント

・介護士：機能訓練の補助

・機能訓練指導員：説明会（レポート配布と指導）

<活動の成果と評価>

利用者の意識が変わり、行動や生活習慣が改善され習慣化された。

・機能訓練に意欲的に取り組む利用者が増えた。

・正しい食事のとり方、家庭でできる運動、睡眠時間等に関心を持つようになり知識が向上した。その結果、AGEsスコアの維持向上を目的に、生活習慣の改善に努める利用者が増えた。

・説明会のあとは利用者同士で話をする時間が増え、コミュニケーションが活発になった。

・家庭での運動が増えた。結果が記載されたレポートを家族で共有し家庭の協力を得ることができた。

・施設としてもより利用者のことを理解して、指導・計画策定することが可能となった。

<課題と今後の取り組み>

山口県内外の他施設で健康増進プラットフォームを広めていく中で、人材育成及び、利用者の情報収集、データ入力などの業務に関わる時間が課題であり、計測機器メーカーに伝えて仕組みを改良していく必要があると考える。

今後、健康寿命の延伸、社会生活を営むために、必要な機能の維持向上に、繋げるための活動として健康教室、認知症カフェ等での活動の場を拡げていく。

<参考資料／連携組織>

内閣府高齢社会白書（令和4年度版）

【連携】（株）島津製作所

1B-3

健康は歯磨きから

研修動画を実施して

口腔ケア

職員への意識づけ

統一したケア

岡山県岡山市

特別養護老人ホームあさひ園

おのだ りえこ
看護師 小野田 利恵子

共同研究者 金平 里沙

共同研究者 角田 綾花

086-233-2212

施設（事業所）
またはサービスの
概要 10p

特別養護老人ホーム、ショートステイ、デイサービス、居宅介護支援事業所
訪問介護、サービス付き高齢者向け住宅

※以下 9p

I. <取り組み課題>

多職種会議で歯科医師より、歯間や歯茎のキワなどに食物残渣が多く残っており、職員によってケアに差が出てしまっている。統一したケアが出来ていないと指摘を受けた。

以前は、施設内研修で歯科医師による口腔ケア方法の指導があった為、直接学ぶ機会があった。しかし、ここ何年か実施していない為、指導を受けたことがない職員が多くなってきている。

II. <具体的な取り組み>

- ① 口腔ケアについて、必要性を理解したうえで実施できているか職員にアンケートを行う。
- ② 対象者を3名選び、個人に合ったケアの方法や注意点等を歯科医師に説明しながらケアをしてもらい動画撮影し、職員に視聴してもらう。
- ③ 視聴後1週間モニタリングを実施し、視聴前後でケアに差が出るか検証する。
- ④ 再度動画を見たことで口腔ケアについての意識に変化があったか職員にアンケートを行う。
- ⑤ 歯科医師よりケアの自己評価方法を教えてもらい、ケアのポイントと合わせて再発信する。再度アンケートを実施し、今回の取り組みから口腔ケアについて意識改革、技術の向上に繋がりを、有効性も見いだせたかを結論付ける。

III. <活動の成果と評価>

歯科医師よりケアのポイントや方法を指導してもらえた事により、職員の口腔ケアに対する意識や技術の向上が見られ、今回の対象者だけでなく、他利用者のケアの実施時にも心掛けるべき点や注意点は同じであることを理解し、実施できる職員が増えたと考える。職員の意識改革、統一したケアの実施ができるようになってきたことで、対象者の中には「うがいをしてくれるようになった」「咀嚼・嚥下がスムーズにできるようになった」「口臭が減ったように感じる」等の効果も出てきている。

IV. <今後の課題>

日々の口腔ケアを確実にを行い、口腔内を清潔に保つことは、ご利用者の健康維持、QOLの向上に大きく関わる。今回のモニタリング期間だけでは、明らかな結果は見られていないが、今後も継続して取り組んでいく必要がある為、まとめた資料をマニュアル化し活用していく事が今後の課題として挙げられる。

V. <参考資料など>

1B-4

排泄ケア見直しから得られた効果の検証

～利用者様と介護者の双方が得た物は？～

失禁へのアプローチ

適切なパッド選定

QOL向上

広島県東広島市豊栄町

特別養護老人ホーム 豊邑苑 ほうゆうえん

介護職 たけざわ めぐみ 竹澤 恵、介護職 かわはら みえ 河原 美恵

共同研究者 黒川 世紀、梶本 研二

共同研究者 石原 明希子

E-mail : houyuen@arion.ocn.ne.jp FAX 082-432-2680

施設（事業所）
またはサービスの
概要

経営主体：社会福祉法人 興仁会 開設年月日：平成10年1月16日
特別養護老人ホーム60名 ショートステイ10名 平均介護度 4.3

I. <取り組み課題>

夜勤のオムツ交換時に、失禁されている利用者様を度々見かける。夜間の失禁は、利用者様の肌トラブルの原因となるだけでなく更衣を行う事により良眠の妨げにもなる。又、紙オムツやリネン類の交換は、介護者の負担・コスト・ゴミの増加にも繋がる。失禁を減らし、利用者様と介護者両方の QOL 向上を目指す。

II. <具体的な取り組み>

- ① 失禁数の調査
 - ・1か月間の、紙オムツ交換枚数の調査実施
 - ・時間帯、汚染の種類別に表を作成
- ② 適切なパッド選定を実施
 - ・肌トラブルがおきにくいパッドを試験的に導入
 - ・夜間のオムツ交換対象者全員の尿測を実施（1週間）
 - ・夜間巡視時の覚醒の有無確認（1週間）
 - ・失禁数、尿測データを基に失禁の原因を検証
 - ・班会議で、尿測データを基にパッド選定実施し、失禁数の検証を実施（1か月）
- ③ 【オムツのあて方】手技の統一や向上を図る
 - ・職員会議内で、排泄研修実施
 - 「テープ止めタイプと尿とりパッドのあて方」
 - ・オムツ交換についての意識啓発を図る

III. <活動の成果と評価>

- ① 適正なパッド選定を行う事により、尿失禁数が30%減少し利用者様と介護者両方の QOL が向上した。
- ② 保水量が多く、肌トラブルの起きにくいパッドの導入により、一部の利用者様に対してではあるが、夜間の良眠を確保する事が出来、昼間しっかり覚醒され元気に過ごされるようになった。
- ③ 失禁数10%減少により、紙オムツのゴミ削減、感染予防物品（手袋等）のコスト削減に繋がった。
- ④ 職員に心身のゆとりが生まれ、研修を実施する事で、意識啓発及び、手技の統一や向上が図れた。

IV. <今後の課題>

季節や体調、服薬状況によって、尿量は変化する為、しっかり利用者様の様子を観察し ADL に応じて適切にアウターやインナーパッドを選定する。

職員の手技の統一や意識啓発を図る為、定期的に研修を実施する。

排泄介護だけにとどめず、食事、入浴、余暇活動においても、多職種連携のもと、更なる専門的知識の習得やサービスの質向上に繋げ、利用者様と介護職員の QOL 向上に発展させていく。

1B-5

高寿園DXの取り組み

ノーリフティングケア

介護ICT

自立支援

新たなチャレンジがみんなを変えていく

岡山県・津山市

(施設種別) 特別養護老人ホーム高寿園 こうじゅえん

職種 介護福祉士 発表者 くにまさり え 國政理絵

共同研究者 岸元智恵美

共同研究者 氏 名 (右詰め 12p)

E-Mail Address kojuen@ruby.ocn.ne.jp

施設(事業所)
またはサービスの
概要 10p

開設: 昭和 56 年 4 月 平成 27 年 11 月ユニット型特養(80 床)新築移転
併設事業: ユニット型ショートステイ 19 床 地域密着型デイサービス
キャッチコピー: 「人が好きだから一生けんめい」

I. <取り組み課題>

2019 年 9 月 15 名のリフトリーダーを養成し、移乗ボード、介護リフト等の福祉用具を活用し、ノーリフティングケアの取り組みを始めた。

- ・リフトを使用する対象者の選別や具体的な活用場面、生活改善等の検討の中で「いままでこうだったから」「この人はこう」という固定観念が新たな取り組みの妨げになっていると感じていた。
- ・限られた人数で行うために「できない」「仕方ない」という気持ちが常態化する中で、個別ケアを行うにあたってのアセスメント力やケアの工夫に対する経験や知識が不足していると感じていた。
- ・決められたスケジュールの中で行う個別ケアに疑問を感じたことがなかった。

II. <具体的な取り組み>

- ・2020 年 5 月にノーリフティングケア推進委員会を立ち上げ、移乗用リフトの本格的な活用を開始し、その一環で受講した研修で、スカイリフトが移乗目的だけではなく、機能回復に効果がある事例を学び、以下の取り組みを始めた。
- 1. 端坐位・意思疎通が可能な入居者から徐々に取り組み対象を拡大。椅子で座位が保て、拘縮のない入居者もスカイリフトを使用してトイレでの排泄をすすめた。
- 2. 円背や座位の不安定な人は、スカイリフトを活用した座位訓練を行った。
- 3. 日々のリフトを使用した移乗の他、健口体操、発声練習、ラジオ体操、音楽療法士と連携した小集団・個別のアクティビティを実施。
- 4. 眠りスキャンを活用した生活改善(朝決まった時間に起き、夜は眠たくなったら寝る。ベッドは寝る場所として睡眠時間以外はベッド以外の場所で過ごす等)の取り組みを行った。

III. <活動の成果と評価>

- ・入居者の多くが体幹や下肢筋力が向上し姿勢がよくなった。
- ・喘鳴や流涎、嚥下状態の改善、下剤の使用が減少した。
- ・生活リズムが整うことにより認知機能、身体機能の改善があり、コミュニケーションが活発になるなどの効果があった。
- ・入居者の身体的・精神的状態が職員の予想を超えて改善したことの達成感からチームワークが向上し、ユニット全体に活気が生まれた。
- ・入居者の状態観察の視点が増え、変化への気づき、ケアの提案ができるようになった。
- ・「こうあるべき」といった固定観念が徐々にではあるが取り払われつつあり、入居者が持つ可能性を考えられるようになった。

IV. <今後の課題>

- ・適切な福祉用具の活用、病気や薬の影響、睡眠や食事、排泄等の生活の状況を把握した多角的なアプローチを検討しながら、生活の改善を目的としたリハビリテーションを継続する。
- ・個別の生活リズムと必要な支援を記載した 24 時間シートを作成し、入居者の可能性を広げるケアを実現したい。
- ・個々それぞれができることを見つけ、役割意識や生活の中の楽しみを充実させたい。
- ・病気や服薬の影響、認知症などの知識、多職種連携のための提案について伝える力が不十分と感じているので力をつけていきたい。
- ・安全を優先するために入居者の可能性を安易に奪わないように個別理解のためのアセスメントを充実させたい。

1B-6

コミュニケーションボードを使用して 気持ちに沿ったケアに繋がった事例

コミュニケーションボード

失語症

気持ちに沿う

広島県 広島市安佐北区

しゃかいふくしほうじんしょうじんかい
社会福祉法人正仁会

とくべつようごろうじん ほーむ
特別養護老人ホームなごみの郷

介護福祉士 にのみや みずえ
二宮 瑞恵

介護主任 佐々木 香里

看護主任 山脇 美紀

E-Mail nagomi@nagominosato.jp

施設（事業所）
またはサービスの
概要

特別養護老人ホームなごみの郷（以下、当施設）は入所定員 80 名、併設ショートステイ利用定員 20 名、計 100 名が 3～5 階のフロアに分かれて生活している。医療と介護の連携を軸に情報共有を重視し、全人的なケアの提供に努めている。

I. <取り組み課題>

脳塞栓症の後遺症で失語症となった A 様に対し、コミュニケーションボードを使用した支援を行った。その結果、A 様のやりたいことがわかるようになり、気持ちに沿ったケアができるようになったため、その経過について考察を交えて報告する。

II. <具体的な取り組み>

A 様は 88 歳、女性で要介護度は 5。2016 年、脳塞栓症により失語症、失行、失認などが出現。別施設への入所や入院を経て、2021 年 9 月に当施設へ入所となる。入所から 1 年が経過する頃、A 様に以下のような行動が見られるようになった。

①ソファに座って過ごしている際、急に立ち上がって廊下を歩行する。あるいはトイレや口腔ケアに誘導している際に、介護職員（以下、CW）の手を引っ張って別の方向に行こうとする。

②うまく言葉が出ないが、職員の言葉をオウム返ししたり、声かけに頷いたり首を横に振ったりする。

上記 2 点についてカンファレンスを行った。A 様は、何か言いたいこと、やりたいことがあるのだけれど、何がしたいのかを CW が理解できていない。少しでも意思疎通を図ることができれば、A 様が何をしたいのかを CW が理解し、対応することができるのではないかと考えた。そこで、「A 様がしたいことを表現し、それを他者が理解できる」ことを目標に取り組みを開始した。

まず、他 CW や言語聴覚士、看護師とも相談し、「飲みたい」「食べたい」「トイレ」「一緒に行く」「お風呂」「寝る」など、A 様が日常生活で使うことがあると思われる事柄を、イラストの上に文字をつけて A4 サイズの書面 4 枚にまとめたコミュニケーションボード（以下、ボード）を作成した。これを、A 様と意思疎通をとる際に使うコミュニケーションツールとして使用していくことにした。また、使用方法や、使用した時の様子の記録方法を CW 間で統一した。

III. <活動の成果と評価>

【経過】ボードの使用を開始した当初は、イラストの意味が理解できない様子だったが、CW が指でさしながら使い方を繰り返し伝えた。1 か月後には使用方法を理解し、自分でボードのイラストを指さして声に出して読むこともあった。2 か月後には CW が「トイレ」と「はい・いいえ」のボードを見せながら「トイレに行きたいですか？」と尋ね、「はい」を指さした際に誘導を行うと、スムーズにトイレに行き、排泄ができるようになった。その半月後にはトイレのイラストを指さして、「トイレ」と言えるようになった。A 様が自らトイレのイラストを指さした時に誘導すると、トイレ内で排泄がみられることが増えた。その他にも、「寝る」を指さした時にベッドに誘導すると、そのまま臥床して休まれるなど、ボードを使用して自分の気持ちやしたいことを表現し、CW に伝えることができるようになった。3 か月後にはボードを使用しなくても職員に「おはよう」とあいさつをするなど、発語が増え、表情も豊かになっていった。

【考察】A 様と意思疎通をしっかりと図れるようになることが、A 様のできることを増やすことに繋がると感じ、ボードを使用した。この選択が A 様のニーズに合っていたと考えられる。そして、CW 間で使用方法や記録方法のやり方を決め、統一した方法で繰り返したことで、使用方法を覚えることができた。これらによって、A 様の職員とコミュニケーションをとりたいという意欲が、より高まったのではないかとと思われる。

IV. <今後の課題>

今回この取り組みによってある程度 A 様の気持ちに沿ったケアができるようになったと考える。今後もボードの使用は続け、「トイレ」や「寝る」ことだけでなく、他の日常生活上の活動、散歩やレクリエーションなどの余暇活動に関しても、自発的な会話ができるよう継続して働きかけ、QOL 向上に努めていきたい。

1B-7

「まだまだできる！でもちょっと助けて」

こだわり・大切

見えない思い

行動変容

利用者の“こだわり生活”立場をかえた関わり方での効果

山口県 下松市

しょうじゅえん で い さー び す せ ん たー
松 寿 苑 デイサービスセンター

生活相談員 ふるか 古川 まい 麻衣

末弘 まさ

久田 昌子

syojuens@siren.ocn.ne.jp

今回の発表の施設
またはサービスの
概要 10p

特別養護老人ホームを母体として、短期入所生活介護、通所介護、訪問介護、居宅介護支援事業所があり、35名定員通常規模型デイサービスセンター

<取り組み課題>

当事業所は「環境の違う利用者」に応じたサービスを丁寧に提供させていただくことを目標に掲げ、日々のサービスを行ってきた。しかし、日中デイサービスに通うことが当たり前であった利用者の生活は新型コロナウイルスの猛威により、日常が一変した。そんな中97才で独居となったKさんを通して「環境の変わった利用者」へ私達は①意識：Kさんの言葉にできない想いを考えることがあったか？②知識：文字におこされている情報以外にKさんを理解しているか？③技術：全職員が目標に沿った支援をしているか？を考え、より個別性のある通所介護計画書に基づく支援提供を課題とした。

<具体的な取り組み>

目的

職員の人材育成、また支援体制強化を目指す事を目的とした。

対象利用者：

98歳 男性 独居 要介護3

平成29年（93才）要介護1、通所介護、週2回利用開始、平成30年妻体調不良にて週4回、訪問介護（生活援助）利用開始、令和3年（97才）妻入院後施設入所、独居となる。

対象職員：

介護職員：15名（ヘルパー兼務経験者7名）

看護職員：2名・作業療法士：1名 計18名

期間：令和5年1月～令和5年4月

内容：

- ①記述式アンケート（私の思っているKさん）実施
- ②職員会議にて再アセスメント情報を元に意見交換
- ③記述式アンケート（今のKさんを知って）実施
- ④職員会議にて支援内容の統一を図る

<活動の成果と評価>

①アンケート実施結果（私の思っているKさん）
職員の思っているKさんのこだわりは娯楽や嗜好との回答12名、妻、畑、役割についての回答6名はヘルパー兼務経験者であった。またKさんのこだわりを意識し支援していると18名全員の回答であったが個人の価値観で支援をしていた事もわかった。

②再アセスメント・情報共有

Kさんの畑で再アセスメントを実施した「囲碁はデイサービスに行く為の楽しみであり、タバコは時間つぶし、入所した妻が自宅に戻ってくる事はないと諦めているが、妻と過ごしたい」という想いを知った。意見交換ではヘルパー兼務経験者と兼務経験のない職員では違ったKさん像である事がわかった。

③アンケート実施結果（今のKさんを知って）

Kさんの強みを知り、一方孤独である事も再認識し価値観の違いに気づきがあったと13名の回答であり、喫煙の課題、ヘルパーとの連携、また積極的な挨拶や声掛けスキンシップを取りたい等支援に対する姿勢の変化が見られた。

④支援内容の統一

通所介護計画の変更、職員会議にて説明統一を図る。アンケート実施時に支援の振り返りを言語化し内省した事、職員の提案が計画書で文字化されている事で周知、実施に効果があった。

<今後の課題>

当事業所は「環境の変わった利用者」へのアセスメントのチャンスは多い。貴重な情報を計画に反映でき、職員間、介護支援専門員、サービス関係機関、家族や地域の方へ効果的に情報共有できる事を課題とする。

<参考資料など>

第七次くだまつ高齢者プラン

1B-8

演題 個別ケアへの挑戦

環境支援

サービス向上

チームケア

従来型特養のハード整備を活かした業務改善

鳥取県・大山町

介護老人福祉施設 ル・ソラリオン名和

介護福祉士 ・ よなみ たけし
世浪 猛

介護福祉士 國谷幸子、中村あゆみ

介護福祉士 宮本佑美、入江麻奈美

E-mail soranawa@med-wel.jp 、FAX 0859-54-6501

今回の発表の施設
またはサービスの
概要

特養入所者の半数以上が多床室で暮らされており、大山町のように申し込み時点で多床室を望まれる地域も少なくない状況。厚生労働省の整備計画では具体化されていないが、従来型施設である当施設で今後も選び続けられるためのハード整備と業務改善に取り組んだ。

<取り組んだ課題>

課題：ユニット化への改修が難しい施設のサービス向上をどのように進めていくか

目的：従来型特養で従来型のメリットを活かし、デメリットを低減すると共に、ユニットケアのメリットを取り入れたリニューアル及び業務改善により、サービスの質の向上を図る

<具体的な取り組み>

「施設改修及びケア体制見直し実施ポイント」

1. ハード面：改修内容

- ・浴室・食堂の増設：各階に特殊浴槽・各チームに浴室・キッチン等を設置
- ・トイレ改修：最新のトイレに変更
- ・4人室減・2人室2室増
- ・看取りの方がご家族と過ごせる居室を整備
- ・感染予防・ゾーニングを想定した環境

2. ソフト面：ケア体制

- ・チームに分かれた勤務シフト作成
- ・ユニットケア環境に近づけたケアの実施
- ・PEAP 日本版勉強会等

<活動の成果と評価>

改修後

食 堂	・チーム毎の食堂 ・スペースが広がり活動しやすい ・待ち時間の解消 ・家庭的な雰囲気
入 浴	・マンツーマンでゆっくり入浴 ・プライバシーが保たれる ・入浴中に穏やかな表情が増 ・同時間帯に各チームが個別入浴可能

改修後・取組後

排 泄	・自走してトイレに行くことが出来る ・ADLにあったトイレの使用が可能 ・転倒のリスクが減少・わかりやすい安心感
シ フ ト	・チーム毎で勤務シフトを作成 ・1日を通して担当利用者とかかわる時間が 増え、細かい気づきができる
チ ー ム 効 果	・利用者のメリットが増えた実感 ・自分の居場所として認識可 ・利用者同士仲の良い関係づくり ・個々の生活リズムに合うケア ・チーム内での有効な情報共有 ・感染対策が行いやすい ・動ける範囲が限られる不便さ

- ・スローライフを大切にできるようになり、利用者のできることが増え、表情にも変化あり

<今後の課題>

- 1.多床室の少ない職員数では、余暇の時間が持ちにくい状況。チーム同士の連携や地域資源の活用で、交流の機会を増やし過ごしやすい環境作りを推進
- 2.チームケア：職員のご利用者とのコミュニケーション力とアセスメント力を高め、施設のカンファレンスの在り方を見直していく方向

<参考資料など>

認知症高齢者への環境支援指針（PEAP 日本版）
社保審一介護給付費分科会第143回参考資料
オアシス介護 特別養護老人ホーム

<https://www.oasisnavi.jp/tokuyou/at-tokuyo-unit/>

1B-9

社会課題「介護離職」と向き合う

2040 年を見据えた介護と企業のパートナーシップ

企業との連携

SDGs17

介護の可視化

岡山県・瀬戸内市

(特別養護老人ホーム) せとうち

採用・広報 発表者 すぎやま 杉山 かおり 香織

E-Mail Address k.sugiyama@basil.ocn.ne.jp

施設（事業所）
またはサービスの
概要

特別養護老人ホームせとうち 瀬戸内市邑久町福中 1180 番地
併設施設を含め、在宅から入所まで暮らしの支援を行う。中高生への福祉教育の
取組がおかやま SDGs アワード 2021 にて「特に優良な取り組み」に採択される。

I. <取り組み課題>

■本研究は、人口減が見込まれる中、地域に必要とされる法人（=ご利用者様の確保）でありつづけるための手段を検討し、提案するものとする。

■2040 年の人口動態（2015 年時点）

瀬戸内市～▲30%、岡山市～▲10%

■国内の介護離職者数 9 万 5000 人（厚労省 2022 年）

II. <具体的な取り組み>

■家族の介護が発生したビジネスパーソン、及び企業へのヒアリングを行う。

■はたらく & かいごパートナーの提案

SDGs17『パートナーシップで目標を達成しよう』を共通言語とし、企業様の介護離職の抑制と、法人のご利用者様獲得を目的としたシステムを構築する。

・一次予防 社員研修

・二次予防 介護サービスの紹介（藤花会含む）

■OPEN CARE PROJECT への参画 介護を「個人の課題」から「みんなの話題」へ転換し、社会で介護の実態を可視化する（経産省 2023 年）

III. <活動の成果と評価>

■高齢化率や経済損失から介護離職は「社会課題」と言われているが、企業単位ではそもそも可視化されていない可能性。

■女性活躍からアプローチすることで、企業にとって介護離職が可視化されるのではないかと。

介護離職者の性別比 女性 75%、男性 25%

■藤花会、企業、ビジネスパーソン、ご利用者様との四方良しの関係を継続することで、法人理念である「地域の中で共に生きる」を実現したい。

■家族（従業員）の中にも必ずしも介護離職が「不幸」なことではなく、「家族として当然」と受け止めている場合もある。

介護離職抑制の社会的システムは必要であるが、支援はあくまでも「個別のニーズ」に沿う必要があると考える。

IV. <今後の課題>

■将来的には、取組の水平展開を目指したい。社会福祉法人の広域的な取組、もしくは新たな事業体の開発も検討される。

V. <参考資料など>

■山中浩之 川内潤 2022 年 10 月「親不孝介護 距離を取るからうまくいく」 日経 BP, 344p

■瀬戸内市 2022 年 4 月「第 3 次瀬戸内市総合計画」P176

■岡山市 2021 年 6 月「岡山市第六次総合計画後期中期計画【概要版】」P28

■ウェルフェア・J・ユナイテッド株式会社 2023 年「特別養護老人ホームの経営力強化」P44

■三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社 令和 4 年 3 月「令和 3 年度 仕事と介護の両立等に関する実態把握のための調査研究事業 企業アンケート調査結果 報告書」P1-P86

■森詩恵 2023 年 1 月「介護保険制度における『介護の社会化』と家族介護—高齢者の生活全体を支える介護支援とはなにか」大原社会問題研究 No. 771

1B-10

地域とのつながりを目指して

地域貢献

資質向上

安定した事業運営

鳥取県・鳥取市

(居宅介護支援事業所) あすなろ西^{にし}ケアプランセンター

介護支援専門員 ^{みき}三木 ^{のりこ}典子
 介護支援専門員 ^{まえた}前田 ^{きょうこ}京子

FAX 番号 0857-54-5060

施設（事業所）
 またはサービスの
 概要

社会福祉法人あすなろ会は鳥取県東部に 15 施設 62 事業（保育、障がい者、高齢者施設）を運営。当施設は、令和 3 年 10 月に居宅支援事業所を統合し開設した。統合後の介護支援専門員は 15 名を配置している。

I. <取り組み課題>

居宅介護支援事業所の統合後に、職員 15 名に統合後のメリット、デメリットについてのアンケートを実施。

「人数が増え相談しやすくなった」といった意見があった反面、「統合前と比べ地域と希薄になっている」「地域貢献できていない」などの課題を感じている職員が多いことが分かった。

地域との関わりが薄くなっていることが当事業所の課題の一つと考え、地域に根差した施設として周知されること、地域貢献活動を通して住民との関係が構築できるよう、取り組みを行った。

II. <具体的な取り組み>

- ・地区の福祉施設（5 事業所）で代表者会を開催。地区内の課題や地域貢献活動について情報共有。今後、各事業所で連携し、地域貢献活動を進めていくこととなった。
- ・地区公民館長を通じて地区社協定例会、民生委員定例会に参加。事業所の説明や、地域貢献に取り組んでいくことを伝えた。
- ・事業所のチラシを作成し、地区内に配布。（共同浴場、開業医、郵便局 各 100 枚）
- ・移動販売車に同行し、販売担当者や利用者から地域の現状や困りごとについて聞き取りを行うとともに、事業所の説明を行った。
- ・住民参加型の話し合いの場、介護予防教室、体操教室等への参加（月 1, 2 回）

III. <活動の成果と評価>

- ・湖南地区の過疎化が進行し、在宅高齢者の人数も減少している現状を再確認した。
- ・近隣の福祉施設との会議を通して、地域貢献をしたいという考えを共有、一緒に地域を盛り上げて行こうという協力体制が構築できた。今後、定期的に会議を開催していく。
- ・職員の地域貢献に対する意欲が高まり、資質の向上につながった。
- ・チラシを見て事業所のことを知っていただくなど、少しずつだが周知が広がっている。
- ・周知が広がっている反面、相談に来られたケースはなく、事業運営面でも目標稼働率には達していない。事業所の地域での役割や介護支援専門員の仕事内容が身近になっていない。

IV. <今後の課題>

- ・当事業所の地域での役割や、介護支援専門員にできることを地域の方に知っていただき、どんな事でも相談してもらえるような関係を築く。
- ・事業所の周知度や、より詳細なニーズ把握のため、地域住民へのアンケートを実施。
- ・福祉防災マップの作成。7 月の大雨で地区内の河川が氾濫したこともあり、防災対策の必要性を強く感じた。
- ・「子供や高齢者の交流の場としての施設提供」、「介護の日に地区内事業所と連携し介護イベント開催」等の意見あり、実施に向け検討中。

V. <参考資料など>

参考文献

「新・社会福祉とは何か 第 4 版」
 著・大久保秀子（中央法規）

1B-11

演 題 ご家族様とご利用者様の心を繋ぐ

副題

家族面会室の取り組み

ご利用者様と家族

家族面会室

笑顔と安心

山口県大島郡周防大島町

種 別・特別養護老人ホーム ほのぼの苑

職 種・介護支援専門員

かしわだ きよみ
柏田 清美

共同研究者 主任介護職員 兼重 拓美

Fax 番号 0820-74-2131

今回の発表の施設
またはサービスの
概要

瀬戸内海に浮かぶ周防大島町。「瀬戸内のハワイ」とも言われている。自然に囲まれた地域にある特別養護老人ホームほのぼの苑 入所定員 50 名 短期入所定員 10 名。本年 4 月 1 日に創立 30 周年を迎えた。

※パワーポイントに使用しております写真は全て
ご家族様の同意を得ております。

<取り組み課題>

新型コロナウイルス感染症が世界中に猛威を振るい、当苑も令和 4 年 1 月に大規模クラスターが発生した。

・面会をはじめ、外出や外泊、苑内行事なども中止せざるを得ない状況が発生。

・ご家族様からは、「自分の家族がどうしているか、顔だけでも見たい。」ご利用者様からは、「なぜ娘や息子様に合わせてもらえないの？」などの不安や不満が多く聞かれるようになった。また、ご利用者様の心理面でのストレス、認知症の進行なども懸念された。

・どのようにすれば、ご利用者様とご家族様の気持ちに伝えられるのかを検討し、スマートフォンやタブレットを使つてのオンライン面会や窓越し面会を行った。

・ある程度の評価をいただくことができたが、音声や声がうまく聞こえないことで、面会がかえってストレスとなったり、画面越しではご家族様のことが認識できないご利用者様がいたことなど、課題が多くあった。

<具体的な取り組み>

・県の補助金にて、陰圧装置を備えた家族面会室が設置できることがわかり、申請→交付決定→設置を経て令和 5 年 2 月 22 日より運用開始。

・1 組 15 分

・月・水・金の午後 3 組

・隔週の土日の午後 2 組

完全予約制にて、家族面会室での面会を実施する。

<活動の成果と評価>

運用開始より、ほぼ全ての枠が予約で埋まり、ほぼ全員のご利用者様のご家族様が面会された。また隔週ではあるが土日の対応も行なったため、平日は仕事をされているご家族様にも面会していただくことができた。

面会実績：2 月 22 日～7 月 21 日のべ 206 組

（その後の面会日程も日々予約で埋まっていく状況）

【ご利用者様の反応】

・ご家族様の顔を見た瞬間、感極まって涙される方。

・片麻痺で動かせないと思っていた右手を、一生懸命に動かし笑顔で「元気よ。」と言われた方など。

【ご家族様の反応】

・「直接顔を見ることができ、安心しました。」

・「これなら安心して面会に来ることができます。」など、多数の方に喜んでいただいた。

その一方で、ご家族様とご利用者様の間に感染予防のビニールシートがあり、直接触れることができないもどかしさを口にされるご利用者様もおられた。

<今後の課題>

5 月 8 日より、新型コロナウイルス感染症が 5 類となり、世の中はウイズコロナからアフターコロナへと変化している。そんな中、苑から二度と感染者を出したくないという思いから、未だにフリーでの面会をしていない。世の中の流れに沿わない対応をしていることを、ご家族様やご利用者様にいかに理解してもらうか。当たり前の生活を取り戻すにはどうしたらいいのかが今後の課題である。

1B-12

せとうちの郷の地域共生

地域共生

コロナ禍

子ども食堂

法人理念「地域の中で共に生きる」の実現のために

岡山県岡山市東区西大寺

(地域密着型特別養護老人ホーム) せとうちの郷^{さと}

生活相談員 発表者 ^{もりた}森田 ^{けいすけ}圭輔

共同研究者 相澤 みゆき

E-Mail k.morita@vega.ocn.ne.jp

施設（事業所）
またはサービスの
概要 10p

地域密着型特別養護老人ホーム 39 床（内短期入所生活介護 10 床）
小規模多機能型居宅介護 登録定員 29 名

※以下 9p

I. <取り組み課題>

地域密着型の特別養護老人ホームとして、法人理念である「地域の中で共に生きる」を実践していたが、コロナ禍になり、感染対策のため施設行事や交流事業が中止となっていった。長引くコロナ禍でも実践していける公益的な取り組みを通じて、改めて「地域」と「共生」していくことを課題として取り組む。

また、公益的な取り組みを通じて、開放的な施設の創造や地域の方との交流機会を持ち、いろいろな世代の方々に福祉業界への興味や関心を持ってもらえるように繋げていきたい。

II. <具体的な取り組み>

- ・開放的な施設づくりのための公益的な取り組みの実践
- ・他法人が実践している公益的な取り組みの調査
- ・和紙を用いたエコバッグの作成と配布
- ・継続したエコバッグ作成のため、紙工業者への協力依頼
- ・子ども食堂の開設
- ・フードバンク依頼のための挨拶回りの実施
- ・子ども食堂開設に向けての地域への発信と協力依頼

III. <活動の成果と評価>

余っている和紙や毛糸でのエコバッグ作成により、地域貢献やSDGsへと発展した。作成しているご利用者様の意欲向上や社会参加にも繋がっている。更なる配布場所に関しての拡充も検討している。

また、藤花ちゃん食堂を通じて地域の方々の定期的なご参加があり、少しずつではあるが、開放的な施設に近づけているように感じている。そして、その中で施設職員と地域の多世代の方々との交流も実現できている。

現在は、屋外から少しずつ屋内へ移行しながらの開催としており、今後は食事の提供方法や子どもたちの調理の参加などに課題がある。子どもたちの居場所づくりにも繋がっているように感じているが、居場所の提供方法や内容も考えていく必要がある。

IV. <今後の課題>

- ・協力ボランティアの増員
- ・施設の認知度の向上
- ・開放的な施設づくりのための他交流事業の展開

V. <参考資料など>

1B-13

さまざまな不安はありつつも、魅力発信へ

地域との関係性

施設の専門性

持続力・発想力

感染症と向き合い、新たな法人として出来ることを

広島県・福山市

特別養護老人ホーム 瀬戸すみれ園

生活相談員 くさかべ ひろし
日下部 浩司

グループホーム 管理者

FAX 084-951-3666

施設（事業所）
またはサービスの
概要 10p

旧法人から、令和5年4月1日に社会福祉法人すみれ福祉会へと新体制。当施設は、約300世帯のある団地内に位置し、特養の他、GH、通所介護、ケアハウスなど。隣接には、同法人の養護老人ホームがある。

※以下 9p

I. <取り組み課題>

- ・2018年より地域との交流を図り、様々な交流を行ってきたが、2020年のコロナ禍以降、感染症を理由に交流に関する活動停止状態へ。
- ・以降、感染症との共生から、施設として何が出来るのか模索。
- ・旧法人は2021年に民事再生となり、利用者様、家族様、地域の方々へ不安を与え、施設内も混乱となる。以降、不安はありつつも、今出来ることを考え、再度施設としての魅力を発信していくへ。

II. <具体的な取り組み>

- ①感染症拡大の懸念よりコロナ禍以降中止していた運営推進会議を、2022年度コロナ感染者数減少時に地域住民等参加促し対面にて開催へつなげる。約1年数か月ぶりの開催となり、地域の役員も初めて会う方々となり、改めて地域の実情把握、コロナ禍の情報共有を図ることに。
- ②団地内住民も高齢化が進み、若手の力を必要。2022年度から団地内花壇の手入れを、瀬戸すみれ園及び同法人の養護老人ホームの職員が毎月一回手伝いに参加。以前より参加していた、団地内公園等の清掃活動にも参加することに。
- ③2022年度から企業が行っている中高校生を対象としている「フィールドスタディ（職業体験）」を施設として受入れ、魅力発信へ繋げる。

III. <活動の成果と評価>

- ①地域との関りが再スタートとなり、改めて避難場所提供時の施設共有スペースを再認識していただく。
対面の中で団地内は、高齢化が進み空き家も出てきており、人の移り変わりが生じている。顔を知らない人もいるという問題から住民同士の助け合いも薄れているという課題がでる。運営推進会議含め、少しでも地域課題へ協力が出来ることを話し合う。以降、2022年度の運営推進会議は、世間の感染者数に応じて実施。2023年度は定期的の実施へ。
- ②花壇整理の参加者は、数名の高齢の方であるため、いつも施設職員の協力に感謝される。花壇の手入れに施設内入居者も散歩道中に参加されることも。
また、2022年度より大中3か所ある団地内公園の清掃活動に2年ぶりの参加へ。
2023年度には、3年ぶりに町内クリーン活動へも参加。参加者を毎回募集をかけ、施設全体での地域活動への参加としていくことに。
- ③「フィールドスタディ（職業体験）」を2022年11月上旬に高校生5名対象に、各専門職が施設で過ごされる高齢者の衣食住について、体験型を通して伝えた。
2023年度も、受け入れ予定。

IV. <今後の課題>

- ・地域交流、福祉の見どころを継続的に実施。
- ・地域貢献活動を、施設全体として取り組んでいくことであり、継続的な対応へと繋がる。